聖霊降臨後第１９主日（特定２１）　　逆らわない者は味方　　２０２４．９．２９．

今日の福音書は、先週の「誰が一番えらいか」という問題の続きのような個所です。自分たちの仲間が競争相手だと思って議論していたのをイエス様から叱られた弟子たちは、今度は他の宗教団体に目が行ってしまったのでしょう。特に、イエス様の名前を使って、悪霊を追い出している人たちが目に入ると、「勝手にうちの先生の名前を使うな。」と叱り飛ばしたい気持ちが起こったのでしょう。

弟子たちの中で、ヨハネとヤコブの兄弟は、イエス様からボアネルゲス、すなわち、「雷の子ら」という名を付けられたほどで、他の人たちのことで気に入らないと、すぐに怒ってしまう傾向があったようです。そのことはマルコ３章に出てくるのですが、今日の所でも、やはりヨハネが発言しています。

「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとしました。」という発言です。雷の子として、特徴的な発言でしょう。

イエス様のグループでもないのに、イエス様の名前を使って、奇跡を起こしている。「勝手に他人の商標を使って、失礼じゃないか」、という気持ちになったのでしょう。本家本元はこちらなんだぞ、とヨハネは言いたかったのでしょう。

わたしたちの周りにも似たようなことがありはしないでしょうか。

キリスト教の名前を使って、金儲けをしているのではないか、という気持ちになるような団体。チャペル式結婚式など、司式しているのは、本物の牧師だろうか、などと疑いたくなるものもあります。

イエス様はそのような活動を容認されているかどうかわかりませんが、９年前、私は茨の冠をシンボルにしている、部落解放同盟のことを例に挙げて説教していました。今日もそれについて、先ず話します。

今から１０２年前。１９２２年大正１１年に、全国水平社という組織が作られました。全国にある被差別部落の人々の解放を実現しようという運動が、水平社運動と呼ばれています。大正末期から昭和初期にかけて活発な運動を展開したのですが、第二次世界大戦中、政府や軍部の圧力を受けて抑えられてしまいました。その後、１９４６年に再び部落解放全国委員会として発足し、１９５５年に部落解放同盟と改称して現在まで続いています。

みなさんもご存知でしょう。その水平社の旗は、黒い布地に、赤い茨の冠がついています。荊冠旗（けいかんき）と呼ばれています。西光万吉（さいこうまんきち）という人がデザインしたようです。

この赤い荊冠は、水平社宣言にある「殉教者がその荊冠を祝福されるときがきた」という言葉に象徴されているように、差別の苦闘の歴史の中で生き抜いてきた被差別部落のひとたちの誇りを意味し、黒い背景は差別のある厳しい世の中を意味している、と言われています。全体として、差別を跳ね返し、被差別者として誇りを持って生きていくという理想を表現しています。

現在、部落解放同盟は、この伝統的な荊冠旗に白い星をつけて、それを真っ赤な旗の左上につけているんだ、と説明されています。他の説明を読むと、荊冠は、ナザレのイエスが十字架の上で被せられた荊の冠であり、受難と殉教の象徴とされる、とあります。

この運動に加わった人々のほとんどは、キリスト教とは関係のない、純粋に人々の解放を願って参加した人々ですが、その人たちの気持ちと、このイエス様のシンボルが、結びついたのでしょう。この場合、教会は「それはイエス様の専売特許だから、勝手に使うな」と批判できるでしょうか。

わたしは、キリスト教の活動ではない人々の中に、福音の本質を見せられることがしばしばあるように思えます。そのことをイエス様が強調されたお話として、すぐ頭に浮かぶのは、善いサマリヤ人のたとえでしょう。

ユダヤ人たちから見ると、サマリヤ人は正統な聖書の教えから離れた、間違った宗教の人々と映るかもしれません。しかし、道で倒れている旅人の隣人として、親身に関わったのは、ユダヤ教の指導者である、祭司やレビ人ではなく、あのサマリヤ人だった、と言われるイエス様の教えには、このような人々の活動と関係があると思うのです。そんな時、相手との違いをわたしたちが強調して、批判するのではなく、共に連帯して、人々の住みやすい社会に変えてゆくこと、それが神様の願いだと思います。

宗像に居た時、２か月に１回の映画会をしていました。普段は一般の映画館でもやっている映画を上映していたのですが、福島の原発事故の関連で、原発の問題を描いた「放射性廃棄物　－　終わらない悪夢」を上映しました。宗像聖パウロ教会からの出席者は数名でしたが、直方の教会の人々が来たり、近くの他の教派の牧師さんや、クリスチャンではないと思える人々も来られて、大勢で映画鑑賞することができました。

わたしが何度か例に挙げました、「もしドラ」の映画などに出てくる、ドラッカーのマーケティングという市場調査の意味が、私自身、少し理解できたような気がしました。わたしたちが何を社会の人々に提供したいか、ではなく、社会の人々が何を求めているのか、という視点で見るなら、人々の関心に対して、わたしたちが提供できるものを考える、ということも大切かなあ、と思ったりしました。

原発の問題については、同じ信仰を持っていなくても、協力して活動してゆける、という可能性があることは、わかったように思えます。聖公会のわたしたちが、カトリックのパンフレットや他の団体のリーフレットを利用するのも、意味があると思いました。そんな問題が今日の福音書のテーマだろうと思います。

２週間前は「上から目線のキリスト教」という話をしましたが、私たちが周りの人たちとどのように関わるかの姿勢を問われているように思えた、今も鮮明に覚えている出来事です。

『わたしに逆らわない者は、わたしの味方である、』という言葉をもう一度受け止め、宮崎でも、映画を見に来られる人には、その人たちに対する敬意を持ちながら、歓迎して一緒に映画を楽しみたいと思います。